行事報告

第一回文学研修を実施して

鶴岡　花織
Kaori TSURUOKA

一、はじめに

本校では平成二十七年度より、座学だけでは学べない、体験型の学習として様々な研修が企画されている。文学研修委員会では、文学散歩と文学研修という行事を実施してきた。

本稿では、平成二十七年度に実施した文学研修について、概要を紹介する。二泊三日で、三月の京都を訪れたものである。

二、文学研修のねらい

本研修は、次の二点をねらいとして行った。

○文学作品のゆかりの地を巡ることで、作品や作家への興味や理解を深める。

○古典作品に関わる建造物や調度品・装束などを実際に見ることで、その世界への親しみを持つと共に、有職故実の知識を増やし今後の古文読解の助けとする。

まず一つにはすでに文学作品に興味を持っている生徒に、より一層魅力を感じてもらいたい、その好奇心に応えたいという気持ちがあった。

その一方で、この研修で大きなテーマとなる「古典」という科目は、ほとんどの生徒が高校一年生で一から学び始めることになる科目である。初期の文法や現代とは異なる語彙などにひるんでしまい、「難解なもの」という印象を持って二年生を迎えてしまう生徒も多い。そんな「古典」への関心を深め、学んでいく意欲につなげて欲しいという思いもあった。そこで、実際の行程を考える時には、まずは参加を促せるよう、いわゆる名所も織り込んだ。

三、実際

参加者は第一学年の女子二十名、男子二名、引率教員二名の計二十四名。文学好きな生徒、京都好きな生徒、どちらでもないが友人と出掛けるのを楽しみに来た生徒……。参加動機は様々だった。

平成二十八年三月十二日（土）から十四日（月）までの二泊三日

で実施した。

本稿では備忘録的に、その時の感慨、生徒の日誌やアンケートの言葉を、行程に沿ってつらつらと綴らせていただきたい。

（一）一日目

一日目の見学は、『源氏物語』が中心になる。京都までの新幹線車中では、『源氏』の登場人物タイプ占いのプリントを配ったり、図書室から借りた『やっぱり面白かった『源氏物語』』（吉海直人著・ＰＨＰ研究所）という本を回し読みしたり、登場人物から『源氏物語』に興味を持ってもらうよう努めた。

京都駅についてすぐにＪＲ線で宇治へ。

平安貴族にとって、宇治は別荘地。舟遊びなどの遊びの地であり、魂の安らぐ宗教的な地でもあった場所である。「宇治＝憂し」の掛詞として、和歌にも古くから頻繁に用いられてきた。都の中心から牛車で何時間もかかる宇治は、平安貴族にとって遠いけれども身近な土地であった。

こうした背景のもと、『源氏物語』最後の十帖、いわゆる「宇治十帖」の主な舞台となったこの地には、『源氏物語』にちなんだモニュメントなどが多数ある。

（一―一）平等院鳳凰堂

源融の別荘が、後に藤原道長の手に渡り、その息子頼通によって、承久七（一〇五二）年に寺院に改められ、創建されたのが平等院である。通称鳳凰堂は阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂。近年修復作業が終わり、創建当時に一番近い状態という今、絶対に見ておきたいスポットだった。十円玉でおなじみの鳳凰堂の美しさはもはや語る必要はないだろうが、塗られたばかりの柱の朱色は、自分が以前に訪れた時の記憶よりもやはり鮮やかで、とても温かな色だった。

ここが文学とどんな関わりがあるかと言えば、はじめに述べた源融という人物が、光源氏のモデルの一人と考えられている人物なのである。源融に関わる場所は二日目以降にも登場するので、歴史の教科書には登場しないであろうこの人物を生徒たちの印象に残しておきたかった。

生徒が昼食場所へ向かっている間に、教員一名で鳳凰堂内の見学のためのチケットを取りに行った。時間指定制になっているこの見学は、事前に電話などでの予約を受け付けておらず、一回の定員が五十名。我々は生徒を二班に分け、鳳翔館（平等院の宝物を収めるミュージアム）とたすき掛けで見学をするのが現実的かと考えていた。混雑時は数時間先まで予約が埋まってしまうこともあるというので、最悪の場合見学不可も覚悟し、生徒にも伝えていた。しかし、実際はうまくチケットが取れ、全員まとまって時間のロスもなく見ることができた。

ガイドの方の案内で堂内に入る。四方を囲む壁は創建当時そのま

まを保っている部分もあるということで、バッグなどをぶつけないよう緊張の見学だった。同じ理由から、堂内は残念ながら撮影禁止。ただ、いつもは池の向こうから臨んでいる堂内から、逆に池を眺めるという珍しい景色を見ることができた。頼通もこういう景色を見たのだろうと思い、わくわくとした気持ちが湧いた。この気持ちのために、今日からの研修はあるのだと、改めて気を引き締めた。

鳳翔館には、もともと鳳凰堂の屋根に飾られていた鳳凰像や、堂内にあった運中供養菩薩像などが並ぶ。生徒たちは展示品一つ一つの説明書きまで熱心に読んでおり、時間が足りない様子だった。

（一―二）宇治上神社

道すがら、先ほどの鳳翔館の説明書きにあった「霊木」という言葉について質問を受けた。こういったやり取りがすぐにできるのが、少人数での研修の利点である。

そんな話をしながら橋を渡って越えたのが宇治川だ。『源氏物語』の浮舟が身を投げる川である。水量、速さともなかなかのものだ。橋を渡った先に、『源氏物語』のモニュメントがある。

更に少し進むと、宇治上神社がある。小さな神社だが世界遺産となっている。

（一―三）源氏物語ミュージアム

復元模型や映像を通じ、『源氏物語』と平安の世界に親しめる博物館。本編中心の春の部屋と、宇治十帖中心の秋の部屋に分かれている。

今回はこちらの学芸員の方にお願いして、「現代と平安の生活習慣の違い」というテーマで四十分ほど講義をしていただいた。『伊勢物語』の「東下り」くらいでしか男女の恋愛的な要素を含む古典作品に触れていない生徒たちは、恋愛様式や結婚形態の現代との違いなどもまだまだ知らないことだらけだ。そのような古典常識の一端に触れてから、展示を見てもらおうと考えた。もちろん『源氏物語』の魅力は恋愛に尽きるわけではないのだが、何しろ展示スペースの春の部屋・秋の部屋共に「垣間見」のシーンが人形で再現されているので、それを知らずに見ても「変な人形があった」で終わってしまうことになる（図1）。講義を担当してくださった方は面白い方で、生徒たちも普段の私たち教員の授業とは違う語り口に興味深そうな様子だった。しかし、電話での依頼だけでは、どのようにお話しいただけるか事前にわからないこともあり、講義を伺う前の、初めの土壌とでも言うべきものを、生徒たちに準備することができなかったことが悔やまれる。

図1

展示見学は一時間弱。自由行動とした。まだ『源氏物語』という名しか知らない生徒が大半だったが、あらすじを紹介する映像を見たり、質問をして来たり、自分から主体的に見学している様子に安心した。

（一―四）東山花灯路

京阪宇治駅を出て、中書島で乗り換え、三条京阪駅で下車。宿で早めの夕食を取り、十八時五十分東山花灯路の散策に出発した。

清水寺に向かう小道を入ると、ぼんやりと温かみのある明かりを灯す行灯が並んでいた。少し行くと別のデザインに変わる。「きれい」と口々に言いながらのんびりと情緒を感じて歩きたい……ところなのだが、この日は土曜であり十日間ある花灯路期間中の初日、多数の人出が予想されるので、混雑に巻き込まれないよう早足で進んだ。

清水寺の前で集合写真を撮り、しばし自由時間。清水坂を産寧坂の入り口まで二人以上での自由散策とし、生徒たちは土産物屋や甘味を楽しんでいた。宿までの帰り道、高台寺の前あたりで、「狐の嫁入り行列」と行き逢った（図2）。一般応募から選ばれた女性が狐の面を付け、白無垢姿で人力車に乗り、花灯路を進んでいくのだ。点けられた狐模様の提灯は可愛らしくもどこか妖しく、神秘的だった。ここで見物客がごった返し、我々の列が二つに分かれてしまった。しかしすぐに合流を果たし、円山公園内のライトアップも堪能して帰着した。残念ながら、桜はまだ咲いていなかった。二時間強の散策となったが、季節柄の寒さもあり、また実施する機会があればもう少し東山に近い宿にできるとより良いと思う。

図2

（二）二日目

（二―一）清水寺

朝食をとり、宿を出発。森鷗外の『高瀬舟』の舞台である高瀬川や、文学作品ゆかりではないが池田屋の跡などを一巡りして、今度は朝の清水寺へ向かう。花灯路期間中は夜間拝観もしているが、混雑回避のため昨夜は中に入っていなかったのだ。

平安時代には、この清水寺、近江の石山寺・三井寺、大和の長谷寺の観音への信仰が厚かった。清水寺の南から今熊野に至る丘陵地一帯「鳥辺野」は平安時代からの葬送の地であり、物語にも描かれている。

道中、祇園のあたりで生徒の一人が体調不良を訴えた。もう一人の教諭が他の生徒を連れ清水寺の見学へ向かい、私とその生徒で祇園に留まった。宿まで戻るには距離があり、まだ店も開いていない時間帯で、しばらく近くのバス停のベンチに座ってもらった。しか

し頻繁に人もバスもやってくるし、お手洗いなどもないため、少し動けるようになったタイミングで八坂神社奥の円山公園に移動して休んだ。

幸い生徒の体調に回復が見られ、他のメンバーと地下鉄の駅で合流した。

（二―二）嵐山

地下鉄から、緑の可愛らしい嵐電に乗りかえて嵐山へ。昼食の予約時間より早く着いたので、予定では眺めるだけだった渡月橋を渡った。急な変更で「川向うのあの山が百人一首で有名な小倉山だ」ということくらいしか語れず、盛り上がりに欠ける間の抜けた時の過ごし方になってしまったと猛省している。

（二―三）嵯峨野散策

昼食後、嵯峨野を散策した。竹林に「いかにも」な京都らしさを感じ、生徒の気持ちは盛り上がった。

見学地は、野宮神社、落柿舎、祇王寺、清涼寺の四か所だが、離れて位置しており坂も続くため、時間と、生徒たちの体力が心配された。

それぞれの見学地の紹介は、口絵3ページをご覧いただきたい。今回、生徒たちのしおりにこのような見学地紹介のページを作った。事前学習の時間があまり取れないためであり、また研修後に振り返り改めてゆかりの文学を手に取ってほしいと考えたためである。見学につながるよう、あえて中心的建物の写真を使わないところや、問いかけのみで全てを書かない部分も作るよう意識した。

落柿舎では、受付で高校生の行事であることを伝えると、不意な来訪にも関わらず案内をして下さった。授業では一切俳句に触れていない生徒たちにどれだけ興味を持たせられるか不安だったので大変助かった。京都なまりの温かな調子で語られるお話に、向井去来という人物が実際に私たちと同じように生きていた、愛される「人」だったのだと実感させてもらえた。テレビ番組で人気の「豆介」の撮影にも使われた場所ということを伺って楽しげに鹿おどしの写真を撮る生徒も多かったが、その後で同じくらい興味深げに小さな草庵内をのぞき込む姿に感心した。

祇王寺も小さなお寺だ。ただ一周歩くだけなら三分かからないだろう。苔むした庭、小さな仏間、吉野窓という大きな窓から差す光の美しさ。現代の美しいものを沢山見聞きしている高校生には、物足りないかも知れない。そう思って、ここは特に『平家物語』に伝わる悲恋のお話を情感籠めて語ってから中に入った。嵯峨野の大分奥にあたる場所で観光客も多くないので、立ち止まってゆっくり時間を取れたのがよかった。女子の多い今回のメンバーは、祇王に大いに感情移入していたように思う。

清涼寺は源融ゆかりの寺。昨日も出てきた名に、「ああ、あの人」という顔をしてくれた生徒もいた。

かなり慌ただしくはあったが、心配されていた時間も体調も問題なく、嵯峨野を後にした。

（二―四）龍安寺

嵯峨野の移動での疲れもあったのか、石庭を前にかなりゆったりと眺めていた。予定より早く到着し滞在時間を伸ばしたが、忙しかった嵯峨野に対して少し時間を余らせていた様子も見られた。常に密な行程でも無理があろうが、今後の時間配分を考える参考にしたい。

（二―五）仁和寺御室会館　宿坊

今回の目玉の一つがこの宿坊での宿泊だ。私の個人的な想像とは全く異なり、広々として大変きれいな、居心地の良いところだった。

夕食は精進料理（図３）。終了後の生徒アンケートでは、「とてもよい体験だった」「もっと素っ気ないものを想像していたが、味付けや素材の良さがよく分かるものだった」「良さがあまりわからなかったけれど、美味しかった。初めて見る料理ばかりで楽しかった」などの感想が出た。

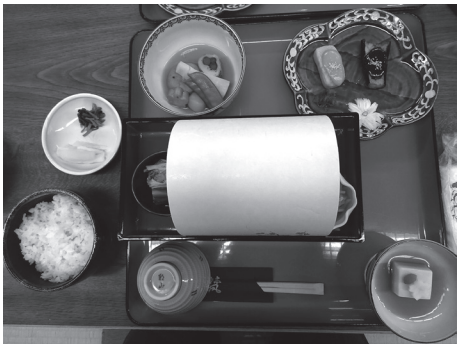

図３

（二―六）ミーティング

二十時三十分からは全員でミーティングを行った。ここまでの中で気に入った場所、魅力的だった場所について、感じた（主観的）ことと、考えた（客観的）ことを、一人一人全員の前で発表するというものだ。そこで意外だったのは、気に入った場所に落柿舎や祇王寺などの嵯峨野を挙げた生徒が半数近くいたことだ。もちろんこの日に行ったばかりだからということもあろうが、「物語が見えた」と語った生徒もいたことは、それだけでこの研修の意味があったと思わせてもらえた。後のアンケートでは、「皆が京都のどんな所に興味を持って見ていたかを知ることができて、次の日の自分の見学の仕方が変わった」という意見もあった。

ミーティングの後半は、私が講義を行った。明日の京都御所見学に向け、紫宸殿と清涼殿の概説である。二十一時を回っていたが、生徒たちは必死についてきてくれた。

読経の声が静かに響く中、夜は更けていった。

（三）三日目

（三―一）仁和寺

最終日の朝は、あいにくの雨。ひどく寒かった。六時十五分に集合して世界遺産の仁和寺金堂でのお勤めを見学させていただくところから始まった。一同緊張の面持ちで堂内に座り、一人ずつ焼香をした。お坊様方が唱える言葉の中には、宿泊した我々「國學院高等学校」の名も読み込まれていた。お勤めが一段落してから法話を頂戴した。「食べ物をいただく」ということに触れたそのお話の後の

朝食は、何となく神妙な気持ちでいただいていたように思う。

朝食後、九時から仁和寺内を見学。後の行程を考えると、早めに見せていただけたらありがたいという打算があったのだが、見学自体は拝観時間内でと決まっていた。しかしまだ他の拝観者があまりいない時間に、お坊様に案内してもらえたのは貴重であった。

（三―二）金閣寺

三十分ほど自由散策で見学。美しい姿は語る必要がないだろう。やはり人が多く、ゆっくりと解説することは難しい場所だった。

（三―三）下鴨神社・糺の森・河合神社

もともと境内を通り過ぎながら駆け抜けるように見る予定だった下鴨神社と糺の森は、到着が遅れたことで実際に駆けていくことになってしまった。河合神社は小さな御社だが、生徒たちも知っている『方丈記』ゆかりの地なので何としても見ておきたかった。短時間の滞在となったが、記憶に留めていつかまた来る指標にしてもらいたい。

昼食場所とその後の御所が移動しづらい位置関係のため、少しでも早く着こうととにかくここの移動は急いだ。

（三―四）懐石料理

昼食は聖護院御殿荘でミニ懐石料理をいただいた（図4）。ミニと言うのがはばかられるほど、テーブルに所狭しと並べられたお料理は非常に美味しく、生徒たちは大満足であった。しかしその分、時間のために食べきれなかった生徒はとても残念そうでもあった。

（三―五）京都御所

本研修の一番のメインと銘打っていたのが御所見学だ。完全予約制で、事前に名前や住所などを届けなければならず、他の見学地よりも格段に行きづらい場所だ。この日の行程をとにかく急いだのは、十三時三十分からのこの御所見学に間に合わせるためであった。

どうにか直前に到着し、簡単な説明を受けてから出発した。ガイドの方の案内のもと、一般の方も含めた百名程での見学になる。ここでちょうど雨が小雨になった。

前夜の説明を思い出しながら見たという声も聞けてよかった。一度の見学で理解や知識の定着に至れた生徒は少ないとは思うが、当初のねらいの通り、知識を増やし、今後の古文学習また古文読解に役立ててほしい。

図4

（三―六）盧山寺

最後に訪れた盧山寺は、紫式部ゆかりの邸宅あとに建つお寺である。御所からの移動手段は徒歩しかなく、少しかかる。

落柿舎に続いて、こちらでもご厚意でご案内していただくことができた。もとの邸宅のお話や、お庭に毎年咲くお花のお話。私も知らないことばかりで、学ばせていただいた。おかげで最後の見学地として大変すばらしいものになった。初日に源氏物語ミュージアムで『源氏物語』について少し触れていたことで、興味を持って見学できたと日誌に書いた生徒もいた。

四、終わりに

研修を実施してから一年も経たずして、京都御所が事前の申請無しに自由に見学できるようになった。京都研修の、目を引く特典、付加価値がなかなか打ち出しにくくなった。それに困難を感じる気持ちを拭えぬままに、他の様々な方面での力も足りず、平成二十八年度の文学研修は参加希望者の不足のため、実施することがかなわなかった。

客観的に見て、この京都研修は地味な研修であると思う。お土産や甘味を楽しめる時間が多いわけではないし、ガイドブックで大きく特集される場所ばかりではない。これは京都の必定だが、寺社仏閣がほとんどだ。それでも参加生徒は皆、主体的に見学をしていた。生徒たちにこのような気持ちを抱かせることができるような、そしてまたその気持ちに応えることができるような研修を企画していきたいと思う。次回は、アクティブラーニングを取り入れた事前学習も含めたプログラムを企画中である。

京都での研修で、ねらいとしたことが本当に達成されたかどうかははっきり確かめられないが、一年経った後でも、「文学研修ありがとうございました」と言ってくれた生徒もいた。参加生徒の中に、それぞれ形は違っても何かが残ってくれたことは間違いないようである。今回本稿を書き、生徒たちの思いにももう一度触れたことで、次回の文学研修の成功を誓う思いを改めて強くした。